中華飛羽 2003.07

No 75

台湾におけるボツリヌス菌中毒後のクロツラヘラサギを見る

魏美莉
中華民国野鳥学会副秘書長

はじめに背景を語る

1849年日本により命名された黒面琵鷺(クロツラヘラサギ)は，全世界に6種いるヘラサギの中で，最も体型が小さく，最も遅く命名された．台湾では清朝時代の1863年に初めてR・Swinhoeにより淡水河河口で観察，記録されてから，1925年，1938年と毎年の冬，台南市の安平地区で約50羽が記録されてきた．顔重威・陳炳煌両先生が台湾の海岸線の管制が厳しい時代の1974年1月9日に台南市曾文渓河口に新しく出来た干潟で21羽を観察し，これが台湾の鳥類関係者の初めての記録である(未発表)．1984年，台南県府の依託により，省水利局第六工事現場の曾文渓河口開発による干潟新生地において，郭忠誠がクロツラヘラサギの生息を発見した．詳細の観察を隔年にするとしたが，1985年11月18日，この年最大の87羽を記録した(未発表)．

郭東輝と郭忠誠は1989年1月22日早朝，曾文渓河口北岸で130羽を観察し，アジア湿地の水鳥調査報告の中に発表し，台湾におけるクロツラヘラサギの最大の越冬地であることが国際的に明らかになり，この鳥の神秘なヴェールが少しずつ開かれてきた．

クロツラヘラサギに対する「台湾での行動」は早かった．1992年師範大学生物科の王穎教授の案内で台南市鳥会がクロツラヘラサギの調査研究を開始した．1994年中央研究院動物研究所の研究員劉小如が第1回Birdlife Internationに参加して，クロツラヘラサギの国際的な共同研究の強化を呼びかけた．1995年1月16日から22日にかけ中華鳥会主催でオランダ，香港，韓国，アメリカ等の国の代表を招待して，台北において「クロツラヘラサギの保護と研究に関して」のシンポジウムを開き，「クロツラヘラサギの行動綱領(Akution plan for the Black-faced Spoonbill)」が採択された．その時，中華鳥会理事長劉小如博士が主催者となり国を越えたクロツラヘラサギの衛星追跡計画を立ち上げた．

王穎教授の研究室で1996年冬，七股においてクロツラヘラサギを捕獲，発信機を取り付け，テレメトリー調査法により台南県曾文渓河口における越冬期の彼らの行動を追跡した．1998年Birdlife Asiaが，国を越えた衛生追跡計画を立ち上げ，王穎教授の指導による台湾クロツラヘラサギ追跡組織が，2月19日8時20分衛星追跡発信機の装着放鳥に成功し，[Lucky7(衛星記号4517)]が世界最初のクロツラヘラサギ衛星追跡研究第1号となった．

重大な中毒か？

国内外の多くの人の関心と期待を集めている七股村のクロツラヘラサギ保護区および重要生息地は，総面積634ha．その内300haが保護区で，行政院農業委員会により2002年11月1日に設定された．これより先，1992年7月1日農業委員会は野生動物保護法により，クロツラヘラサギを保護すべき絶滅危惧種野生動物と指定してちょうど10年が過ぎた．引き続きクロツラヘラサギの観察記録を続け，短い期間に688羽に達し，人々が700羽を越えるであろうと期待している時，出来事が起った．

ボツリヌス菌による同様の事件は，世界各地で見られた事例の特性として，同じところで繰り返し発生するということがあり，自然界における死亡率は非常に高く，万の数に達することがある．

を忘れることはできない．行政としかるべき範囲で協力し，指導した．1989年，香港鳥類報告によるPeter R. KennerleyはTクロツラヘラサギが生存するためには唯一完全な保護を頼みとしている．わずかに３つの越冬地(台湾，香港，ベトナム)に保護と開発利用の与える影響は決定的なものがある．同様に北朝鮮の海域にある小島の完全な保護も重要だ」と呼びかけた．

以来連続して自慢のクロツラヘラサギの最も多くの群が台湾で越冬している．1992年から通して，学者と保護団体が合同してクロツラヘラサギに関する研究を行ない，台南地区の保護団体の活動が芽生え，七股地区の自然生態観察ツアーとして発展し，これまで地元民の生態観察ツアー解説の努力もあり，実際，休日には七股大地区に露店が市をなすのを見ることができるなど，一度訪れた人々は誰でも知っている．

さらに1999年１月11日台南の曾文渓河口で放鳥された衛星追跡発信機2219号，台湾記号Ｔ16，研究者による愛称「カメのクロツラ」(寓話兎と亀より)が３月14日，台南を離れ，３月15日，福建省および浙江省沿岸域に現れ，３月19日には江蘇省の塩城自然保護区附近に滞在し，３月31日，南北朝鮮休戦ラインの漢江河口外U-do島附近に出現した．台湾で越冬しているクロツラヘラサギの渡りのルートおよび繁殖地が解明され，台湾に於けるクロツラヘラサギの保護が世界的に重要視されることとなった．　しかし，人が問題だ，この後から台湾の保護関係機関はクロツラヘラサギ研究を相変わらず一時放置したままで，かえって韓国や香港が積極的に研究を加速した．この現象はクロツラヘラサギの動向に長期的関心がない台湾を憂慮させる．研究には，ウサギトカメの寓話を忘れてしまってはいけない，ただ地味に一歩一歩足跡を印して，基礎的資料を累積してこそ，台湾の生物全体が見える日が来るのである．

保護団体は「持続社会」であれ

蘇煥智県長によれば，今回の事件の処理のしかたは，すなわち中央と地方政府および民間団体の協力作業のよい経験であった．疑いもなく，今回のクロツラヘラサギの事件で第３者団体の演じた役割は，結果において重大な鍵を与えた．民間団体は今日まで十数年来，台湾の自然保護運動を通して，クロツラヘラサギを国際舞台へ送りだした役者なのだ．

台南地域開発に対し，蘇煥智は環境保護の立場を明確にしていたのに，今までの仕事の対象はどこにあったというのか，残された時間は少ないというのに，ちょうどその時，クロツラヘラサギの台湾での住家周辺に「選挙飛行場」を建てるために努力している．七股近くの2000haの塩田が民営化された後，県や府から土地の管理権を取得する蘇県長の胸中での計算を推測することはそれほど難しいことではない．

雲嘉南(ナンイン)県市を跨いだ南瀛国家風景区が成立するとすぐ，絶え間なく数が変わるクロツラヘラサギの新しい問題について言えば，彼らクロツラヘラサギの反応はどうか，さらに，言い古された言葉を一言，民間公益団体は決して休むことはない，政治家は一時的な反応だけ，何世代もこの土地に足を据えた民衆と大自然こそ主人公なのである．

訳 福井和二